



第 40 回 (平成 21 年 8 月 12 日) 定例会の講演要旨

「14歳で拓北農兵隊の一員として」曙の地に入植

田中篤之助氏 (虻田郡洞爺湖町花和204-1)

第 40 回例会の今夜 (8 月 12 日) は、曙に拓北農兵隊の一員として入植した田中篤之助氏 (ラッキーヒル牧場経営) を講師にお招きしました。手付かずの原野を耕地とする労苦は、筆舌に尽くしがたいものがあったようです。いわば、「昭和の屯田兵」でした。昭和 47 年、虻田町 (現・洞爺湖町) に転居、現在も牧場を営んでいます。配付した資料にもあるように、私たちが承知しない曙の歴史が盛り沢山で、さらに肉付けされたどんなお話が飛び出すか、大きく興味が膨らみます。(茂内義雄副会長の挨拶から)



現在の地名でいえば、新宿・歌舞伎町に住んでいました。米軍による首都空爆が相次ぎ、焼け跡の整理と遺体搬出に動員された日々でした。私は海城中 1 年でした。小学校 6 年から机を並べて勉強した記憶がありません。昭和 20 年 6 月、練馬の豊島園で開かれた父の勤務する保険会社の運動会の帰り、父が「北海道に行く」と突然言い出しました。14 歳でした。

警報が鳴らなかった 7 月 6 日、一家 11 人で上野から列車に乗りました。弁当も水も出ず、トンネルの中で機関車だけがどこかに行ってしまう置き去りにされたり、津軽海峡では潜水艦の攻撃がありそうとの情報で連絡船が出ず、9 日、まだ明けきらない軽川駅 (現・手稲駅) に着きました。私たちは、長い列車の最後尾にいました。「杉並隊は降りろ」との大声で、私はホームがない線路に真っ先に飛び降りました。拓北農兵隊第 1 号となりました。



軽川小学校 (現・手稲中央小) で休み、藤の湯の風呂が用意されていました。小さな子どもたちがキャツ、キャと喜んでいたので覚えています。手稲神社で入植式が行われ、用意された馬車に荷物を積んで、その後ろを歩きました。どこまでもまっすぐな樽川道路が不思議でした。あてがわれた宿舎は牛舎の廃屋でした。異様な臭気がしました。16 世帯の共同生活が始まりました。ムシロを下げただけの粗末なものでした。見ると聞くのとでは大違いでした。親たちの嘆息が頭にあります。

持ち込んだ食料はたちまち底をつきました。自生するワラビがいっぱいありました。これを米に混ぜて食べるのです。みんな黒いウンコをするようになりました。樽川道路は 3 本の筋が深い溝になっていました。馬が足を運ぶ道に馬車の両輪の跡です。前方から馬車が来ようものなら大変です。交差できないのです。馬車には必ずスコップを積んでいました。重い荷物を運ぶとき、溝がしばれる冬に早くならないかと思ったくらいです。

入植してすぐ終戦になりました。既存の農家にすれば、農兵隊は異様な集団と見られました。あるとき、草取りの援農に出かけました。すると、大人は畑に入るなといわれました。私たちは会社員、指物屋、大工、経理屋、役人、警察官らで、およそ農業とは無縁の人ばかりなので、作物と雑草の見分けがつかないのです。作物を摘み取って、雑草を残してしまうのです。

開拓の手が入らない荒地でした。起こしても地力のない泥炭でした。タネは支給されるものの芽がでません。3 俵まで 1 俵しか取れないこともありました。タネを食べたことも再三です。脱落して帰京する人もいました。札幌で勤めを始めた人もいます。手稲本町の弥彦神社の土で客土しました。手稲鉾山のズリを貰い受けて道路に敷き詰め、やっとトラックが出入りできるようになりました。

〔→ 裏面へ続く〕

篠野雄一さんの「琴似から見た手稲」をお聞きして

釣本峰雄



篠野雄一さんの「琴似から見た手稲」というお話は、郷土の歴史を今残っている地名や川の流れ方から推測する、新しい見方が印象的で興味深く聞けました。特に中の川や追分川と線路の位置関係や、小樽内川が定山溪にも存在することなど、これから調べてみたい話題を提供してくれました。

また小樽内の大排水路「新川」を誰がどのようにして掘ったのかも、とても興味深い話題でした。この工事は生振捷水路にも匹敵する大事業ですが、その詳細があまり知られていないのは残念なことです。その他に手稲村と琴似村の境が、今の手稲区と西区の境とはかなり違うことも興味をそそる話題でした。それから幌内鉄道が日本で2番目に開通したという説も、理屈から言えば確かにその通り

なので、とても面白く聞きました。いずれにしてもまたの機会に、もっと掘り下げたお話が聞ければと期待しています。

次回の予定

次回（10月14日）は、会員の研究発表、加藤利昭会員の「手稲山口、バツタ塚」と舘岡良三会員の「山口村の由来」を予定しております。



《手稲の誇りとナゾ：3》 手稲パラダイスヒュッテ

現在の建物は1994年再建の2代目。初代は日本初の本格的なスイス式山小屋、スキーヒュッテの国内第1号。北海道帝国大学（北大の前身）スキー部が1926年に創部15周年記念に創建。設計は当時札幌在住のスイス人建築家マックス・ヒルデル。ヒュッテ実現に尽力した人は大野精七医学部教授（博士）スキー部長。ドイツ留学の経験から札幌市民の健康増進をスキーで！と考え市近郊の山々にスキーツアー用ヒュッテ整備の雄大な夢「山小屋鎖」構想を持つ。その第1号が手稲山中腹の「雁皮平」。名前は側に滑降に最適の斜面「パラダイス（楽園）」スキー場があるのにちなんだという。以後、軽川駅（現手稲）は日曜などスキーヤーでごった返し。約6kmのスキー場への道はスキーヤーの人波に埋まる勢い。老朽化進み1978年に惜しまれて閉鎖。安心したように3月初代ヒュッテは大雪で倒壊！同年12月400米ほど西に新ヒュッテ完成。ソーラー発電、浄化槽など近代化した初代の姿を再現し、ほのぼのとしたぬくもりがある。「山は厳父、小屋は慈母」の古き良き山小屋の風情を21世紀に伝える山小屋である。[月刊アイワード] 331号より要約紹介。

[文責：野村武雄]

〔→ 表面より〕

し尿処理場ができたとき、道路を整備すること、電柱を配置すること、電話を引くことを条件に、役所と再三掛け合いました。地域の整備が始まると、今度は不動産屋が暗躍し始めました。札幌が遠望できる場所で、農業が続くはずはないと思いました。私の場合、4.5ヘクタールをそっくり売却し、先輩の奨めもあって虻田に転地しました。昭和47年でした。

私たちの頭には、農業がダメなら町を創ろうという意識がありました。「東京の血」は時代の推移に敏感です。商店に転業して成功した人もいます。私たちの土地売却がきっかけで、曙は大変革する住宅地になりました。私たちは、そのきっかけを作ったと誇りに思っています。

私は、売却代金で100ヘクタールの土地を購入、現在、150頭の乳牛を飼育、約100頭を搾乳しています。息子と孫が営農しており、私はほとんど隠居です。ときおり手稲に来て、同級生らと交流していますが、敗残兵だった私も、手稲で根を張り枝を広げ、足跡を残すことができた喜びです。

◇ 例会終了後、入植地に近い飲食店に席を移し、田中さんを中心に2世、3世と会員計14人が持ち寄った古い写真を見ながら、苦難時代や楽しい思い出などに花を咲かせ、つつい翌日にまたがるほど盛り上がりました。

[文責：一ノ宮]